

中国六朝古小説訳注『列異伝』(一)

先 坊 幸 子

『列異伝』訳注は、六朝古小説研究のための基礎資料収集とその読解を目的とし、現在続けている「中国六朝古小説訳注」作成の一部である。既に「晋・干宝『搜神記』」(白帝社 二〇〇四年)、「宋・陶潜『搜神後記』」(白帝社 二〇〇八年)、「齐・祖冲之『述異記』」(『中国古典文学研究』七)、「宋・東陽無疑『齐諧記』」(『中国中世文学研究』第五八号)、「梁・呉均『統齐諧記』」(『中国中世文学研究』第五九号)を発表し、引き続き「宋・劉義慶『幽明録』」、「宋・劉敬叔『異苑』」、「梁・任昉『述異記』」、更に仏教の影響の強い「宋・劉義慶『宣驗記』」、「齐・王琰『冥祥記』」等の訳注の作成を予定している。

魏・文帝『列異伝』は、六朝期に於ける志怪小説集の一つである。しかし現在では既に失われ、類書等に引用されている説話を残すのみとなっている。それらの説話は『列異伝』として魯迅『古小説鈎沈』にまとめられている。『隋書』経籍志・雜伝に「列異伝三卷魏文帝撰」とあるが、『旧唐書』経籍志・雜伝類および『新唐書』芸文志・小説家類は張華の撰とする。文中には文帝以降である「景初(二三七)〜二二九年)」、「正始(二四〇〜二四九年)」、「甘露(二二五六)〜二六〇年)」年間のことが記されており、後に増補されたものか、

或いは別の撰者の『列異伝』と混同されたものか、正確なところは分らない。

この度は『古小説鈎沈』を参考に、全四十七条の内「01 陳倉祠」から「07 欒侯」までの七条を取り上げ、類書所引『列異伝』を用いて字句の校勘をした上で訳注を施した。

01 陳倉祠

秦穆公時、陳倉人掘地得異物。其形不類狗、亦不似羊、衆莫能名。牽以獻穆公、道逢二童子。童子曰「此名為媼」^①、常在地下食死人腦。若欲殺之、以柏挿其頭。」媼復曰「彼二童子、名為陳宝。得雄者王、得雌者霸。」陳倉人捨媼逐二童子、童子化為雉、飛入平林。陳倉人告穆公。穆公發徒大獵、果得其雌。又化為石、置之汧渭之間。至文公、為立祠、名陳宝。雄飛南集。今南陽雉畎其地也。秦欲表其符。故以名畎。每陳倉祠時、有赤光長十余丈。從雉畎來、入陳宝祠中、有声如雄鷄。^②

秦の穆公の時、陳倉の人地を掘りて異物を得たり。其の形狗に類ず、亦た羊に似ず、衆能く名づくる莫し。牽きて以て穆公に獻ぜ

んとするに、道に二童子に逢ふ。童子曰く「此れ名を媼と為し、常に地下に在りて死人の脳を食ふ。若し之を殺さんと欲せば、柏を以て其の頭に挿せ」と。媼復た曰く「彼の二童子、名を陳宝と為す。雄を得る者は王となり、雌を得る者は覇となる」と。陳倉の人媼を捨てて二童子を逐ふに、童子化して雉と為り、飛びて平林に入る。陳倉の人穆公に告ぐ。穆公徒を発して大いに獵し、果たして其の雌を得たり。又た化して石と為れば、之を汧渭の間に置く。文公に至り、為に祠を立て、陳宝と名づく。雄飛びて南に集ふ。今南陽の雉県、其の地なり。秦其の符を表せんと欲す。故に以て県に名づく。陳倉祠の時毎に、赤光の長さ十余丈なる有り。雉県従り来り、陳宝の祠中に入り、声の雄鶏の如き有り。

【通釈】

秦の穆公の時、陳倉の人が地面を掘つて不思議なものを手に入れている者はいなかった。連れて行って穆公に献上しようとしたところ、その途中で二人の子供に出くわした。子供が言うには「この名は媼といい、いつも地の下において死人の脳味噌を食べるのです。もしこれを殺したいと考えるなら、柏をその頭に挿しなさい」と。また媼が言うには「あの二人の子供は、名を陳宝といいます。雄を手に入れた者は王者となり、雌を手に入れた者は覇者となります」と。陳倉の人は媼を捨てて二人の子供を追い掛けたが、子供は雉に化け、飛んで平林に入ってしまった。陳倉の人はこの事を穆公に告げた。穆公は兵を出して大掛かりな獵をし、果たして雌の方を手に入れた。更に石に化けたので、これを汧水と渭水の間に置いた。文公

の時、この石の為に祠を立て、陳宝と名づけた。雄の方は南へ飛んで行った。今の南陽の雉県がその地である。秦はその靈験を世にあらわそうと考えた。それで県にこの名をつけたのである。陳倉の祭礼の都度、長さ十丈あまりの赤い光が差した。雉県から来て、陳宝の祠の中に入り、雄の鶏が鳴くような声が聞こえた。

【語釈】

*この話は『史記』卷二八・封禪書注（素隠）、『北堂書鈔』八九、『芸文類聚』九〇、『太平御覽』九一七に見える。また、この事は『搜神記』八（『史記』卷五・秦本紀注引）、『史記』卷五・秦本紀の注（正義）に引く『晋太康地志』、『漢書』卷二五上・郊祀志第五上、『宋書』卷二七・符瑞志上、任昉『述異記』下、『水経注』卷一七・渭水篇に見える。

① 秦穆公―春秋、秦の主。徳公の第三子。名は任公、諡は穆。春秋五霸の一人。在位は三十九年（前六五九）前六二一年。（『史記』五）

② 陳倉―県名。秦に置かれた。故城は陝西省寶鶏県の東。秦の文公が築いた。

③ 其形不類狗、亦不似羊、衆莫能名―この十三字、『芸文類聚』、『太平御覽』、『搜神記』、『宋書』は「若羊非羊、若猪非猪」（羊の若くして羊に非ず、猪の若くして猪に非ず）八字に、『史記』秦本紀の注は「若彘、不知名」（彘の若きも、名を知らず）五字に、任昉『述異記』は「若羊非羊、似猪非猪」八字に作る。

④ 媼―媼神。土地の神。この字、『史記』は「媼」に、任昉『述異記』は「媼」に作る。

⑤ 汧渭―汧水と渭水。汧水は、川の名。源は陝西省隴山の西北の汧山の南麓。古の龍魚川。渭水に注ぐ。渭水は、川の名。源は甘肅

省渭源県の西の鳥鼠山。黄河に注ぐ。渭河、渭川。

⑥文公―春秋、秦の主。襄公の子。諡は文。在位五十年(前七六五―前七一六年)。(『史記』五)

⑦南陽雒陽―南陽郡雒陽。河南省南召県の南。「雒」字、「宋書」は「穰」に作る。

⑧從雒陽來―「県」字、「北堂書鈔」は「城」に作る。

⑨有声如雄鷄―「鷄」字、「北堂書鈔」、「芸文類聚」、「搜神記」は「雒」に作る。また、『搜神記』及び『宋書』はこの後に「其後、光武起於南陽」(其の後、光武南陽に起こる)八字がある。

02 怒特祠

①武都故道県有怒特祠、云神本南山大梓也。昔秦文公二十七年、伐之、樹瘡隨合。秦文公乃遣四十人持斧斫之、猶不斷。疲士一人、傷足不能去、臥樹下。聞鬼相与言、曰「勞攻戰乎。」其一曰「足為勞矣。」又曰「秦公必持不休。」答曰「其如我何。」又曰「赤灰跋於子何如。」乃默無言。臥者以告。令士皆赤衣、隨所斫以灰跋樹。断化為牛入水。故秦為立祠。

武都故道県に怒特祠有り、神は本南山の大梓なりと云ふ。昔秦の文公の二十七年、之を伐るに、樹瘡随ひて合す。秦の文公乃ち四十人を遣はして斧を持って之を斫らしむるに、猶ほ断たれず。疲れし士一人あり、足を傷つけて去く能はず、樹下に臥す。鬼の相ひ与に言ふを聞くに、曰く「攻戦に勞るるや」と。其の一曰く「勞ると為すに足らんや」と。又た曰く「秦公必ず持して休めざらん」

と。答へて曰く「其れ我を如何せん」と。又た曰く「赤と灰もて子を跋さば何如せん」と。乃ち黙して言無し。臥す者以て告ぐ。士をして皆な赤衣せしめ、斫る所に随ひ灰を以てし樹を跋す。断ちて化して牛と為りて水に入る。故に秦為に祠を立てた。

【通釈】

武都郡故道県に怒特祠があり、その御神体は元々南山の大きな梓の樹だという。むかし秦の文公の二十七年、これを伐ったところ、樹の瘡は伐るにしたがつて塞がつてしまった。そこで秦の文公は四十人を遣わして斧でこの樹を斫らせたが、それでも切り倒すことは出来なかった。一人の疲れた兵士がおり、足を傷つけて歩くことが出来ず、樹の下で横になっていた。幽鬼が仲間と語っているのが聞こえて、言うには「戦って疲れたか」と。その片方が言うには「どうして疲れるに足るうか」と。また言うには「秦公は必ずこのまま止めることはないだろう」と。答えて言うには「彼は私をどうすることも出来ない」と。また言った「赤と灰を使ってお前を倒そうとしたらどうするのだ」と。そこで黙ったまま何も言わなくなった。横になっていた者はこの事を語った。兵士すべてに赤い着物を着せ、切り口にすぐに灰をすり込んで樹を倒した。樹は切られると牛に化けて水の中に逃げ込んだ。そこで秦はこの樹の為に祠を立てた。

【語釈】

*この話は「水経注」卷一七・渭水篇、「後漢書」光武紀注、「北堂書鈔」一三〇、「芸文類聚」九四に見える。また、この事は『搜神記』一八、「後漢書」郡国志五注に引く『搜神記』、「太平御覽」九〇〇に引く『搜神記』、「事類賦」注二二に引く『搜神記』、「史記」卷五・秦本紀注(正義)に引く『録異伝』、「初学記」八に引く『録異

伝、『太平寰宇記』三十に引く『録異伝』、『太平御覽』四四に引く『録異伝』、『北堂書鈔』一三〇に引く『玄中記』、『太平御覽』六八〇に引く『玄中記』、『太平御覽』三四一に引く『列仙伝』に見える。

秦文公時、梓樹化為牛、以騎擊之、騎不勝。或墮地、髻解被髮。牛畏之入水。故秦因是置旄頭騎、使先驅。(『後漢書』光武紀注)

秦の文公の時、梓樹化して牛と為り、騎を以て之を撃たんとするも、騎勝たず。或いは地に墮ち、髻解けて被髮す。牛之を畏れて水に入る。故に秦、是れに因りて旄頭騎を置き、先驅せしむ。

秦時、武都故道有怒特祠。祠上生梓樹。秦文公二十七年、使人伐之、輒有大風雨。樹創隨合、經日不斷。文公乃益發卒、持斧者至四十人、猶不斷。士疲還息。其一人傷足、不能行。臥樹下。聞鬼語樹神、曰「勞乎攻戰。」其一人曰「何足為勞。」又曰「秦公將必不休、如之何。」答曰「秦公其如予何。」又曰「秦若使三百人被髮以朱絲繞樹、赭衣灰塗伐汝、汝得不困耶。」神寂無言。

明日、病人語所聞。公於是令人皆衣赭、隨斫創、塗以灰。樹斷、中有一青牛出、走入豐水中。其後、青牛出豐水中。使騎擊之不勝。有騎、墮地復上、髻解被髮。牛畏之、乃入水不敢出。故秦自是置旄頭騎。(『搜神記』一八)

秦の時、武都の故道に怒特祠有り。祠上に梓樹を生ず。秦の文公の二十七年、人をして之を伐らばむるや、輒ち大風雨有り。樹の創、隨ひて合し、日を經るも断たれず。文公、乃ち益す卒を發し、斧を持する者四十人に至るも、猶ほ断たれず。士は疲れ還りて息ふ。其の一人足を傷つけ、行くこと能はず。樹下に臥す。鬼の樹神に語るを聞くに、曰く「攻戰に勞るるや」と。其の一人曰く「何ぞ勞ると為すに足らん」と。又曰く「秦公將に必ず休めざらん、之を如何せん」と。答へて曰く「秦公、其れ予を如何せん」と。又曰く「秦、若し三百人をして髪を被り朱絲を以て樹に繞らし、赭衣灰塗して汝を伐らば、汝困しまざるを得んや」と。神寂として言無し。

明日、病む人聞く所を語る。公是に於て人をして皆な赭を衣せ、

斫創に隨ひ、塗るに灰を以てせしむ。樹断たれ、中より一青牛の出づる有り、走りて豐水中に入る。其の後、青牛、豐水中より出づ。騎をして之を撃たしむるも勝たず。騎有り、地に墮ちて復た上り、髻解けて髪を被る。牛之を畏れ、乃ち水に入りて敢へて出でず。故に秦、是れ自り旄頭騎を置く。

① 武都故道県——地名。武都郡故道県。今の甘肅省成県の西。

② 怒特祠——祠の名。秦の文公が南山の大梓を伐つた時に樹中から出た青牛を祀る。

③ 云神本南山大梓也——この八字、『搜神記』は「祠上生梓樹」(祠上に梓樹を生ず)に、『太平御覽』九〇〇は「土生梓樹」(土に梓樹を生ず)に、『事類賦』は「上生梓樹」(上に梓樹を生ず)に、『史記』集解は「凶大牛、上生樹木」(大牛を凶き、上に樹木を生ず)に、『史記』正義および『太平御覽』四四は「雍南山有大梓樹」(雍南山に大梓樹有り)に、『初学記』は「雍州南山文梓樹」(雍州南山の文梓樹)に、『太平寰宇記』は「雍南山有梓樹」(雍南山に梓樹有り)に、『太平御覽』六八〇は「終南公有梓樹、大数百圍、蔭宮中」(終南公に梓樹有り、大きき数百圍にして、宮中を蔭す)に作る。

④ 秦文公——春秋、秦の襄公の子。諡は文。在位五十年(前七六五—前七一六年)。(『史記』五)この三字、『太平御覽』六八〇は「秦始皇」に作る。

⑤ 伐之——この二字の後、『搜神記』、『史記』正義、『太平寰宇記』、『太平御覽』四四は「輒有大風雨」(輒ち大風雨有り)五字、『太平御覽』六八〇は「天輒大風雨、飛沙石、人皆疾走、夜至」(天

輒ち大風雨あり、沙石を飛ばし、人皆な疾走し、夜に至る) 十
四字あり。

⑥ 疲士一人、臥者以告—この六十字、『後漢書』光武紀注、『北堂書
鈔』に引く『列異伝』及び『玄中記』、『芸文類聚』、『後漢書』郡
国志五、『史記』集解、『初学記』、『太平御覽』三四一に無し。

⑦ 赤灰—この二字、『搜神記』は「以朱絲繞樹、楮衣灰盆」(朱絲を
以て樹に繞らし、楮衣灰盆す) 九字に、『太平御覽』九〇〇、『事
類賦』は「楮衣灰盆」四字に、『史記』正義、『太平實字記』は「以
朱絲繞樹」(朱絲を以て樹に繞らす) 五字に、『太平御覽』四四は
「以朱絲繞伐樹」(朱絲を以て繞らせ樹を伐る) 六字に、『太平御
覽』六八〇は「以赤絲繞樹」(赤絲を以て樹に繞らす) に作る。

⑧ 跋—この字、『搜神記』、『史記』正義、『太平實字記』、『太平御覽』
六八〇は「伐」に作る。

⑨ 牛入水—「牛」字、『搜神記』、『事類賦』、『史記』正義、『初学記』、
『太平實字記』、『太平御覽』四四、『北堂書鈔』に引く『玄中記』、
『太平御覽』六八〇は「青牛」に作る。「水」字、『芸文類聚』、『搜
神記』、『史記』正義、『太平實字記』は「豊水」に、『初学記』、『太
平御覽』四四、『玄中記』は「澧水」に、『北堂書鈔』に引く『玄
中記』及び『太平御覽』三四一は「河」に作る。

⑩ 故秦為立祠—『搜神記』、『太平御覽』九〇〇、『事類賦』、『北堂書
鈔』に引く『玄中記』、『初学記』、『太平實字記』、『太平御覽』四
四、『太平御覽』六八〇にはこの句が無く、『搜神記』、『太平御覽』
九〇〇、『事類賦』、『太平實字記』、『太平御覽』四四および六八〇
には「旄頭騎」が置かれたという記述がある。「旄頭騎」は、先

驅の騎士。「旄」字、『北堂書鈔』一三〇は「髦」に作る。

03 干将莫邪

① 干将莫邪為楚王作劍、三年而成。劍有雄雌、天下名器也。乃以雌
劍獻君、藏其雄者。謂其妻曰「吾藏劍在南山之陰、北山之陽。松
生石上、劍在其中矣。君若覺殺我。爾生男、以告之。」及至君覺、
殺干将。

妻後生男、名赤鼻、告之。赤鼻斫南山之松、不得劍。忽於屋柱中
得之。楚王夢一人、眉広三寸、辞欲報讐。購求甚急。乃逃朱興山
中、遇客。欲為之報。乃刎首、將以奉楚王。客令鑊煮之、頭三日
三夜跳不爛。王往觀之、客以雄劍倚擬王、王頭墮鑊中。客又自
刎。三頭悉爛、不可分別。分葬之、名曰「三王家」。

干将莫邪、楚王の為に劍を作り、三年にして成る。劍に雄雌有り、
天下の名器なり。乃ち雌劍を以て君に獻ぜんとし、其の雄なる者を
藏す。其の妻に謂ひて曰く「吾劍を藏して南山の陰、北山の陽に在
らしむ。松石上に生じ、劍其の中に在るなり。君若し覺らば我を
殺さん。爾男を生まば、以て之に告げよ」と。至るに及びて君覺
り、干将を殺す。

妻後に男を生み、赤鼻と名づけ、之に告ぐ。赤鼻南山の松を斫
るに、劍を得ず。忽ち屋柱の中に於て之を得たり。楚王一人を夢む
るに、眉の広さ三寸、辞して「讐に報いんと欲す」と。購ひ求む
ること甚だ急なり。乃ち朱興山中に逃れ、客に遇ふ。之が為に報
いんと欲す。乃ち首を刎ね、將に以て楚王に奉ぜんとす。客鑊を

して之を煮令むるも、頭三日三夜跳ねて爛れず。王往きて之を觀るに、客雄劍を以て倚りて王に擬すれば、王の頭鑊中に墮つ。客又た自刎す。三頭悉く爛れ、分別する可からず。分ちて之を葬り、名づけて曰く「三王家」と。

【通釈】

干将莫邪は楚王の為に劍を作り、三年かかつて出来上がった。劍には雄と雌とがあり、天下の名器であつた。そこで雌劍を王に献上することにし、その雄の方を隠してしまつた。自分の妻に向かつて言うには「私は劍を南山の北、北山の南に隠しておいた。松が石の上に生え、その中に劍がある。王がもしこの事に気づいたら私を殺すだろう。お前が男の子を産んだなら、それにこの事を話さない」と。献上に行くとき王はこの事に気がついて、干将を殺してしまつた。その妻は後に息子を産み、赤鼻と名づけ、これに事の次第を話して聞かせた。赤鼻が南山の松を研つたところ、劍は見つからなかつた。にわかにかの家の柱の中にこの劍を見つけた。楚王が一人の男を夢に見たが、眉間の広さが三寸あり、「讐に報いたい」と言つた。王は賞金をかけて厳しく搜索した。そこで朱興山の中に逃れ、客に出会つた。客はこの息子の為に王に報いようとした。そこで息子の首を刎ね、それを持って行つて楚王に奉せんとした。客は鑊でこれを煮させたが、この頭は三日三夜のあいだ跳ねて爛れなかつた。王が様子を見に行つてこれを覗き込んだところを、客が近寄り王の首に雄劍を当てると、王の頭は鑊の中に落ちた。客も自らの首を刎ねた。三つの頭は全て爛れ、見分けることが出来なかつた。等分してこれらを葬り、その墓は「三王家」と名づけられた。

【語釈】

*この話は「太平御覽」三四三注に見える。また、この事は「搜神記」一一、「法苑珠林」三六に引く「搜神記」、「太平御覽」三四三注に引く「搜神記」、「太平御覽」三四三および三六四に引く「吳越春秋」、「太平御覽」三四三に引く「烈士伝」、「太平御覽」三四三に引く「孝子伝」に見える。

楚干将莫邪為楚王作劍、三年乃成。王怒、欲殺之。劍有雌雄。其妻重身当産。夫語妻曰「吾為王作劍、三年乃成。王怒、往必殺我。汝若生子是男、大、告之曰「出戸望南山、松生石上、劍在其背。」於是即將雌劍、往見楚王。王大怒、使相之「劍有二、一雄一雌。雌来、雄不来。」王怒、即殺之。

莫邪子名赤、比後壯、乃問其母曰「吾父所在。」母曰「汝父為楚王作劍、三年乃成。王怒、殺之。去時囑我「語汝子。出戸望南山、松生石上、劍在其背。」於是子出戸南望、不見有山、但觀堂前松柱下石砥之上。即以斧破其背、得劍。日夜思欲報楚王。

王夢見一兒、眉間広尺。言「欲報讐。」王即購之千金。兒聞之亡去。入山行歌、客有逢者、謂「子年少、何哭之甚悲耶。」曰「吾干将莫邪子也。楚王殺吾父。吾欲報之。」客曰「聞王購子頭千金。將子頭与劍来。為子報之。」兒曰「幸甚。」即自刎、両手捧頭及劍奉之、立僵。客曰「不負子也。」於是屍乃仆。

客持頭往見楚王。王大喜。客曰「此乃勇士頭也。当於湯鑊煮之。」王如其言。煮頭三日三夕、不爛。頭踣出湯中、蹟目大怒。客曰「此兒頭不爛。願王自往臨視之。是必爛也。」王即臨之。客以劍擬王、王頭隨墮湯中。客亦自擬己頭、頭復墮湯中。三首俱爛、不可識別。乃分其湯肉葬之。故通名「三王墓」。今在汝南北宜春界。（「搜神記」一一）

楚の干将莫邪は楚王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒、之を殺さんと欲す。劍に雌雄有り。其の妻身重くして当に産むべし。夫妻に語りて曰く「吾王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒り、往けば必ず我を殺さん。汝若し子を生まて是れ男なら

ば、大となりしとき、之に告げて曰へ「戸を出でて南山を望めば、松石上に生じ、劍は其の背に在り」と。是に於て即ち雌劍を將ち、往きて楚王に見ゆ。王大いに怒り、之を相せ使むるに「劍に二有り、一は雄一は雌なり。雌來りて、雄來らず」と。王怒り、即ち之を殺す。

莫邪の子名は赤、後に壯となるに比び、乃ち其の母に問ひて曰く「吾が父の所在は」と。母曰く「汝が父楚王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒り、之を殺す。去きし時我に囁す「汝の子に語れ。戸を出でて南山を望めば、松石上に生じ、劍其の背に在り」と。是に於て子は戸を出でて南に望むも、山有るを見ず、但だ堂前の松柱石砥の上に下るを觀るのみ。即ち斧を以て其の背を破り、劍を得たり。日夜思ひて楚王に報いんと欲す。

王夢に一兒を見るに、眉間の広さ尺なり。言ふ「鬮に報いんと欲す」と。王即ち之を千金に購ふ。兒之を聞きて亡げ去る。山に入りて行歌するに、客の逢ふ者有り、謂ふ「子は年少きに、何ぞ哭することの甚だ悲しき耶」と。曰く「吾は干将莫邪の子なり。楚王吾が父を殺す。吾之に報いんと欲す」と。客曰く「王子の頭を千金に購ふと聞く。子の頭と劍とを將ちて來れ。子の為に之に報いん」と。兒曰く「幸甚なり」と。即ち自刎し、両手に頭及び劍を捧げて之に奉じ、立ち僵る。客曰く「子に負かざるなり」と。是に於て屍乃ち作る。

客頭を持ちて往きて楚王に見ゆ。王大いに喜び。客曰く「此れ乃ち勇士の頭なり。當に湯鑊に於て之を煮るべし」と。王其の言の如くす。頭を煮ること三日三夕なるも、爛れず。頭湯中より踴出し、躡目して大いに怒る。客曰く「此の兒の頭爛れず。願はくは王自ら往きて臨みて之を視よ。是れ必ず爛れん」と。王は即ち之に臨む。客劍を以て王に擬すれば、王の頭隨ひて湯中に墮つ。客も亦た自ら己が頭に擬し、頭復た湯中に墮つ。三首俱に爛れ、識別す可からず。乃ち其の湯肉を分ちて之を葬る。故に通じて「三王墓」

と名づく。今汝南の北宜春界に在り。

- ① 干将莫邪—古の二つの名劍の名。干将是呉(一説に楚、又、一説に韓)の刀匠の名で、莫邪はその妻の名。呉王闔閭の為に協力して陰陽二劍を造り、陽の劍を干将、陰の劍を莫邪という。「捜神記」、「法苑珠林」は「楚干将莫邪」五字に作り、「太平御覽」三四三に引く「呉越春秋」は「干将者呉人」五字に作る。

- ② 為楚王作劍—「楚王」二字、「太平御覽」三四三に引く「呉越春秋」は「闔閭」に、「太平御覽」三四三に引く「烈士伝」は「晋君」に、「太平御覽」三四三に引く「孝子伝」は「晋王」に作る。

- ③ 名赤鼻—この句、「捜神記」、「法苑珠林」は「名赤」二字に、「太平御覽」三六四に引く「呉越春秋」は「眉間尺」三字に、「太平御覽」三四三に引く「孝子伝」は「眉間赤名赤鼻」六字に作る。

- ④ 乃逃朱輿山中—この六字、「捜神記」、「法苑珠林」は「兒聞之、亡去、入山行歌」(兒之を聞きて亡げ去り、山に入る)九字に作る。

- ⑤ 三日三夜—この四字、「太平御覽」三六四に引く「呉越春秋」は「七日七夜」に、「太平御覽」三四三に引く「烈士伝」は「三日」に作る。

- ⑥ 三王家—「捜神記」、「法苑珠林」はこの後に「今在汝南北宜春界」(今汝南の北宜春界に在り)九字がある。「汝南北宜春界」について、「太平御覽」三六四に引く「呉越春秋」は「汝南宜春界」とする。「漢書」卷二八・地理志第八上には「北」字が無く、「後漢書」卷三〇・郡国志二は「北宜春」と記す。当時、豫章郡にも宜春界(漢に置かれた。江西省吉安県の西北)が置かれていた。汝南郡宜春界は今の河南省汝南県。「漢書」卷二八・

04 無忌

①魏公子無忌、曾在室中讀書之際、有一鳩飛入案下、鶴逐而殺之。
 ②忌忿其搏擊、因令國內捕鶴、遂得二百余頭。忌按劍至籠曰「昨擲
 鳩者当低頭服罪、不是者可奮翼。」有一鶴、俯伏不動。

魏の公子無忌、かつて室中に在りて讀書するの際、一鳩有りて飛びて
 案下に入るも、鶴逐ひて之を殺す。忌其の搏撃するを忿り、因り
 て国内に令して鶴を捕へしめ、遂に二百余頭を得たり。忌劍を按じ
 て籠に至りて曰く「昨鳩を擲せし者、当に低頭して罪に服すべし。
 是れならざる者は奮翼す可し」と。一鶴有り、俯伏して動かず。

【通釈】

魏の公子の無忌は、かつて部屋の中で讀書していた時、一羽の鳩
 が飛んできて机の下に入ったが、鶴が追い掛けてきて鳩を殺して
 しまった。忌は鶴が鳩を撃ち殺したことを忿り、そこで国中に命
 じて鶴を捕らえさせ、その結果二百頭余りの鶴を捕まえた。忌
 は劍の柄に手を掛けて籠に近寄ってこう言った「昨日鳩を殺した者
 は頭を低れて罪に服せ。そうでない者は翼を奮わせよ」と。すると
 頭を下げて動かないものが一羽いた。

【語釈】

*この話は『太平広記』四六〇に見える。

①魏公子無忌―生年未詳―前二四四年。戦国・魏の昭王の少子で、
 魏の安釐王の異母弟。諱は無忌。昭王が薨じ、安釐王が即位する

と、信陵君に封ぜられた。戦国四君の一人。秦に圧迫を受けた魏
 を支え、諸国をまとめて秦を攻めるも、安釐王に疑われ、過度の
 飲酒の為に亡くなった。(『史記』七七)

②搏擊―この二字、明鈔本『太平広記』は「鷲戾」(粗暴で道理に
 もとる意)に作る。

③擲鳩者―「擲」字、明鈔本『太平広記』は「殺」に作る。

05 魯少千

魯少千者、得仙人符。楚王少女為魅所病、請少千。少千未至數十
 里止宿。夜有乘髓蓋車、從数千騎來。自称伯敬、候少千。遂請内
 酒數榼、肴饌數案。臨別言「楚王女病、是吾所為。君若相為一還、
 我謝君二十万。」千受錢、即為還。從他道詣楚、為治之。於女舍
 前、有排戶者、但聞云「少千欺汝翁。」遂有風声西北去、視処有血
 滿盆。女遂絶氣、夜半乃蘇。王使人尋風、於城西北得一死蛇。長
 數丈、小蛇千百、伏死其旁。後詔下郡県、以其日月、大司農失錢
 二十万、太官失案數具。少千載錢上書、具陳説、天子異之。

魯少千は、仙人の符を得たり。楚王の少女、魅の病ましむる所と為
 り、少千に請ふ。少千未だ至らざること数十里にして止宿す。夜
 髓蓋の車に乗り、数千騎を從へて來る有り。自ら伯敬と称し、少
 千を候ふ。遂に内酒數榼、肴饌數案を請ふ。別れに臨みて言ふ
 「楚王の女、病むは、是れ吾の為す所なり。君若し相ひ為に一たび
 還らば、我君に二十万を謝す」と。千錢を受け、即ち為に還る。
 他道の道従り楚に詣り、為に之を治す。女の舍前に於て、戸を排せん

とする者有り、但だ「少千汝翁を欺く」と云ふを聞く。遂に風声有りて西北に去り、処に血の盆に満つる有るを視る。女遂に氣を絶し、夜半乃ち蘇る。王人をして風を尋ね使むるに、城の西北に於て一死蛇を得たり。長さ数丈あり、小蛇千百、伏して其の旁に死す。後に詔して郡県に下すに、其の日月を以て、大司農錢二十万を失ひ、太官案数具を失ふ。少千錢を載せて上書し、具に陳説するに、天子之を異とす。

【通釈】

魯少千は、仙人のおふだを手に入れた。楚王の末の娘が妖怪によつて病気にさせられ、少千に治療を依頼した。少千はその地から数十里離れたところで宿を取った。夜にすっぽんの甲羅の覆いのある車に乗り、数千騎を従えてやつて来る者がいた。自ら伯敬と名乗り、少千に挨拶した。そのまま数個の酒樽に入った内酒と、数脚の机に載った酒肴を持って来させた。別れに臨んで言うには「楚王の娘が病気になったのは、私がやったことだ。もしあなたが私の為に引き返してくれるならば、私はあなたに二十万のお札をする」と。千は錢を受け取り、直ぐに引き返した。他の道から楚に行つて、娘の病を治した。娘のいる建物の前で、扉を退けようとする者がいたが、ただ「少千は俺様を欺いた」と言うのが聞こえるだけだった。そのまま風の音が聞こえて西北の方へ去り、処々に盆に満ちるほどの血が溜まっているのを見た。娘はそのまま氣絶し、夜半になつて蘇った。王が使いを出して風の方向を捜させたところ、城の西北で一匹の死んでいる蛇を見つけた。長さは数丈もあり、小さい蛇が千百ほど、その側で伏して死んでいた。後に郡・県に詔を出して調べ

ると、その月のその日に、大司農が二十万の錢を失ひ、太官の数案の御馳走が無くなつていた。少千は錢を添えて上書し、詳しく説明すると、楚王はこれを不思議な事とした。

【語釈】

*この話は『太平広記』四五六に見える。

① 楚王少女―『太平広記』はこの後に「英」字あり。

② 内酒―宮中の酒。

③ 汝翁―老人が子や目下の者に対し、自分をさしていう。

④ 大司農―漢代、穀貨を掌る長官。大農令。

⑤ 太官―官名。秦に置かれた。少府の属。宮中の膳羞を掌る。

06 公孫達

① 任城公孫達、甘露中為陳郡。卒官、將斂、兒及郡吏數十人臨喪。

② 達有五歳兒、忽作靈語、音声如父。呵衆人「哭泣。吾欲有所道。」

③ 因呼諸兒、以次教戒。兒悲哀不能自勝。乃慰之曰「四時之運、猶

④ 有所終。人物短脆、当無窮。」如此数千語、皆成文章。兒乃問曰

⑤ 「人死皆無知、惟大人聰明殊特。独有神耶。」荅曰「存亡之事、未

⑥ 易可言。鬼神之事、非人知也。」索紙作言、辞義滿紙。投地云「封

⑦ 書与魏君宰。莫有信来、即以付之。」其莫、君宰果有信来。

任城の公孫達、甘露中に陳郡と為る。官に卒し、將に斂せんとして、兒及び郡吏數十人喪に臨む。達に五歳の兒有り、忽ち靈語を作すに、音声父の如し。衆人を呵す「哭泣止めよ。吾道ふ所有らんと欲す」と。因りて諸兒を呼び、次を以て教戒す。兒悲哀して自

ら勝ふ能はず。乃ち之を慰めて曰く「四時の運すら、猶ほ終る所有り。人・物短脆なるも、当に窮まること無かるべし」と。此くの如きこと数千語、皆な文章を成す。兎乃ち問ひて曰く「人死すれば皆な知無きに、惟だ大人のみ聡明なること殊特なり。独り神有るや」と、答へて曰く「存亡の事、未だ言ふ可きに易からず。鬼神の事、人の知るに非ざるなり」と。紙を求めて言を作すに、辞義紙に満つ。地に投じて云ふ「書を封じて魏君宰に与へよ。莫に信の有れば、即ち以て之を付せ」と。其の莫、君宰より果たして信の来る有り。

【通釈】

任城の公孫達は、甘露年間に陳郡太守になった。官に就いたままで亡くなり、納棺しようとする時、その息子や郡の役人達が数十人ほど喪に臨んだ。達には五歳の息子がおり、俄に霊が乗り移って言葉を発したが、その声は父と同じであった。集まった人々を叱って言うには「哭するのを止めなさい。私は言いたいことがあるのだ」と。そこで息子たちを呼び、年の順に教え戒めた。息子たちは悲しみに堪えることが出来なかった。そこで彼らを慰めて言うには「四季の運りさえ、なお終わりがある。人や物は儂く脆いが、滅びることとは無いのだ」と。こうして数千語を告げたが、みな文章を成していた。息子が尋ねて言うには「人間は死んでしまえばみな知覚が無いというのに、ただ父上だけは特別聡明です。父上だけ心が残っているのですか」と、答えて言うには「生死のことは、いまだ簡単に言うことは出来ない。鬼神の事は、人に理解できるものではない」と。紙を用意させて文を記すに、言葉が紙いっぱい記されていた。それを地に投げて言うには「書を封じて魏君宰に送りなさい。暮れ

に使者が来る筈だから、すぐにこれを渡すように」と。その暮れに、果たして君宰からの使者が来た。

【語釈】

*この話は『太平御覧』八八四、『太平広記』三二六に見える。

- ①任城―県名。漢に置かれた。今の山東省濟寧県。
- ②甘露―前漢の宣帝劉詢の年号（前五二―前四九）。
- ③陳郡―郡名。南朝宋に置かれた。治は陳県。河南省淮陽県の治。
- ④達有五歳児―因呼―この二十五字、四庫全書『太平御覧』は「公達止」三字に作る。「吾欲有所道」五字、『太平広記』に無し。
- ⑤人物短脆、当無窮―この七字、『太平広記』は「人儂短殊、誰不致此」（人は儂短殊なるも、誰か此を致さざらん）に作る。
- ⑥皆成文章―「成」字、『太平広記』は「合」に作る。
- ⑦存亡之事、未易可言―この八字、『太平広記』に無し。
- ⑧投地云、封書与魏君宰、莫有信来、即以付之、其莫、君宰果有信来―この二十五字、『太平広記』は「投地遂絶」（地に投じて遂に絶ゆ）四字に作る。

07 爨侯

①漢中有鬼神爨侯、常在承塵上。喜食鮮菜、能知吉凶。甘露中、大蝗起、所経処禾稼輒尽。太守遣使告爨侯、祀以鮮菜。侯謂吏曰「蝗虫小事。輒当除之。」言訖、翕然飛出。吏髣髴、其状類鳩、声如水鳥。吏還、具白太守。果有衆鳥億万、来食蝗虫、須臾皆尽。

漢中に鬼神爨侯有り、常に承塵の上に在り。鮮菜を食ふを喜び、

能く吉凶を知る。甘露中、大いに蝗起り、経る所の処、禾稼は輒ち尽く。太守使をして爰侯に告げ遣め、祀るに鮮菜を以てす。侯吏に謂ひて曰く「蝗虫は小事なり。輒ち当に之を除くべし」と。言ひ訖るや、翁然として飛び出づ。吏髣髴たるも、其の状は鳩に類て、声は水鳥の如し。吏還り、具に太守に白す。果たして衆鳥億万有り、来りて蝗虫を食ふに、須臾にして皆な尽く。

【通釈】

漢中に爰侯という鬼神がおり、常に承塵の上にいる。鮮菜を食べるのが好きで、吉凶のことを知っていた。甘露年間、蝗が大発生し、それらが通ったところの稲はみな食べ尽くされた。太守は使を立てて爰侯に告げさせ、鮮菜を供えて祀った。侯は役人にこう言った「蝗ごとく大したことはない。すぐに除いてやろう」と。言い終わると、さっと飛び出していった。役人にはほんやりとしか見えなかったが、その姿は鳩に似ていて、声は水鳥のようだった。役人は戻って、太守に詳しく報告した。果たして億万もの鳥があらわれ、やって来て蝗を食べ、すぐに食べ尽くした。

【語釈】

*この話は『北堂書鈔』一四六、『太平広記』二九二に見える。

漢川神常在承塵上、喜食鮮菜。〔北堂書鈔〕一四六

漢川の神 常に承塵の上に在り、鮮菜を食ふを喜む。

① 漢中―陝西省南西部。

② 承塵―屋根裏から落ちる塵などを防ぐ為、部屋の上方に板・布・筵等を張ったもの。

③ 鮮―酢漬けの魚。

④ 甘露―前漢の宣帝劉詢の年号(前五二―前四九)。

⑤ 禾稼―穀物。穀類。

⑥ 翁然―多くのものが一つに集まり合う様子。

〔二〇一一・九・二九 受理〕